釧路市動物園基本構想

平成21年12月

釧路市動物園

目　　次

Ⅰ　はじめに　・・・3

Ⅱ　基本理念　・・・4
「いのちとふれあい、いのちをつむぐ」
―何度でも来たくなる動物園―

Ⅲ　基本理念を実現するための３つの目標　・・・5
1　「いのち」を伝える
(1)　いのちの大切さを伝える
(2)　環境保全の大切さを伝える
2　感動と発見のある動物園
3　誰もが楽しめる動物園

Ⅳ　目標達成のための基本方針　・・・7
1　生息環境や展示目的を明確にしたゾーン再整備を行います
(1)　北海道ゾーン　:「ふるさとの動物たち」
(2)　寒帯動物ゾーン　:「寒さを生きる知恵」
(3)　熱帯動物ゾーン　:「多様な環境・多様な生き物」
(4)　ふれあいゾーン　:「命にふれる」
2　展示を支えるソフトの充実を目指します
3　快適な園内環境の整備に努めます
(1)　園内施設の整備充実
(2)　娯楽施設の充実
4　健全な動物園運営を進めます
(1)　市民理解を得た財政運営、整備計画
(2)　年間 18 万人の入園者を目指して
5　市民と共に歩む動物園づくりを進めます

Ⅴ　基本構想の実現に向けたスケジュール　・・１２

Ⅵ　基本構想イメージ図　・・１３

Ⅰ　はじめに

動物園は、昭和 45 年の釧路市総合計画の中で「大規模自然観光レクリエーション地帯開発構想」に基づき、昭和 47 年に山花地区に設置することが決まりました。また、釧路空港のジェット機就航に伴ない、鶴公園の保護増殖部門を切り離して国庫補助による「タンチョウ保護増殖センター」を動物園に隣接して設置することも決まりました。

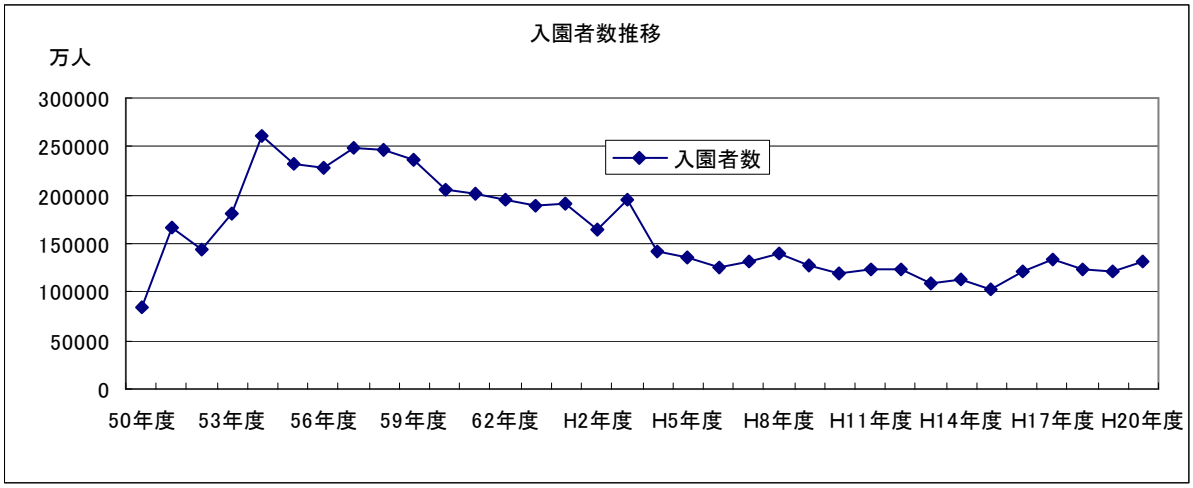
昭和 50 年(1975 年)10 月 1 日、国内最東端の動物園として道内 5 番目にオープンした釧路市動物園は、「タンチョウ保護増殖センター」を含めると国内最大級の敷地面積を有し、北方系動物のみならず、市民要望を取り入れて熱帯産の動物の飼育展示を行なうほか、のりもの広場を設置し、遊園地機能を備えた道東地域のレクリエーション施設として位置づけられています。

道内では初めての導入となったレッサーパンダやアフリカゾウのほか、昭和 54 年にはサル山と猛獣舎、昭和 58 年には類人猿舎、平成元年にはヒグマ牧場を建設、平成 5 年以降はハクチョウ池、木道散策路、ふくろうの森など、「北海道ゾーン」として自然環境を取り入れた施設整備を進めています。

また、広い敷地と、動物園に蓄積された飼育繁殖技術を生かし、ケガなどで弱った野生動物の治療を行ない、野生に戻すことのできない希少動物については非公開ケージで繁殖させてその子どもたちを野生に戻す試みに取り組み、道東の野生動物の保護施設としても中心的な役割を果たしています。

しかし、入園者数は昭和 54 年の 261,099 人をピークに減少に転じ、平成 15 年には 103,721 人まで落ち込みましたが、現在は 12～13 万人で推移しています。

開園 30 年以上を経過し動物舎の老朽化に伴う改修がこれからの大きな課題となっている中で、動物園がこれからも多くの市民の憩いの場・学びの場として利用されていくよう、ここに動物園の将来像を「基本構想」として策定しました。



Ⅱ　基本理念

釧路市は、阿寒・釧路湿原という２つの国立公園を有する「環境都市」として、「自然と共生するまちづくり」を進めています。自然とふれあうことから得られる感動や安らぎは人間性の回復をもたらし、豊かな心を育てます。そうした自然環境と都市機能の調和を図り、魅力あるまちづくりを進めるためには、自然に対する理解を深めることが不可欠です。

しかし今、人間の活動が野生生物を激減させ、地球環境を変え、めぐり巡って私たちの生活を脅かしています。かつて絶滅の危機にあったタンチョウを復活させた努力を、今度は野生動物が自力で生きていくために必要な生態系の保全に振り向けなければなりません。

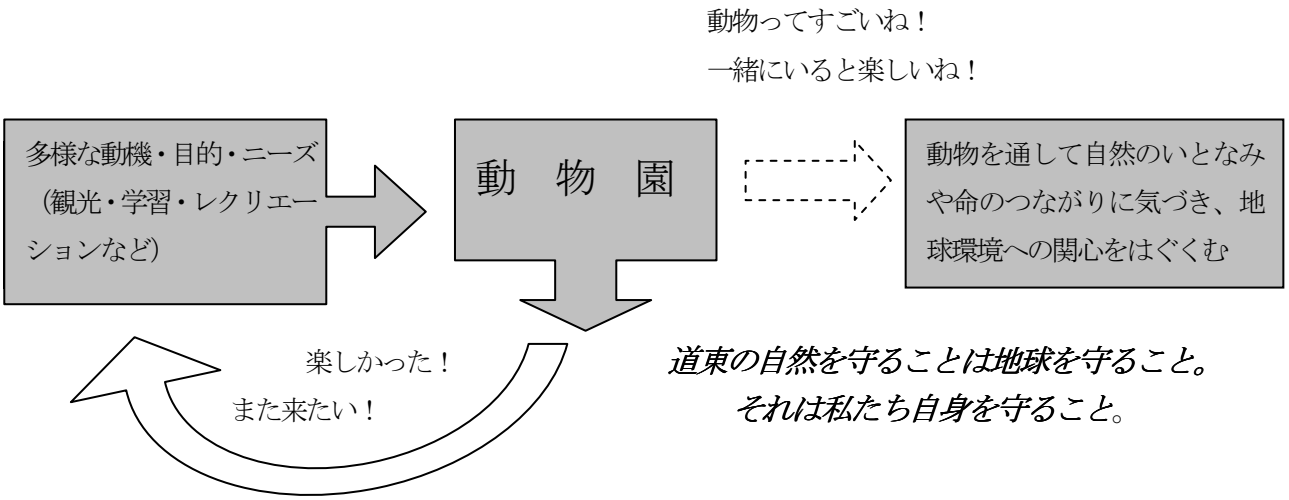
たくさんの生き物が網の目のようなつながりの中で暮らしています。動物たちとふれあい、生き物相互のつながりの不思議やおもしろさを知ったとき、かけがえのない地球において人間もまた自然を構成する一員であり、共に生きていくことが私たちの生活を豊かにすることに気づかせてくれます。

それぞれの生き物が伝えようとしているいのちとそれをはぐくむ自然にふれ、この豊かな環境を次代に残すために何が必要かを考えることができるよう、動物園はいのちとふれあい、いのちをつむぐ役割を担います。

『いのちとふれあい、いのちをつむぐ』

―　何度でも来たくなる動物園　―

これを釧路市動物園の基本理念とします。



Ⅲ　基本理念を実現するための３つの目標

動物園には国籍、年齢を問わず、たくさんの方が来園されます。どのような方がいつ訪れても、動物園から帰るときには「楽しかったね、また来ようね」と言ってもらえる動物園でありたい。楽しかったからまた行ってみたいという気持ちを持ち続け、何回行っても新しい発見がある、釧路市動物園でしか味わえない経験や感動がある、そんな動物園でありたいと願っています。

動物園は、「博物館法」において「自然史系博物館のうち、生きた動物を扱う博物館」として扱われ、日本動物園水族館協会では４つの目的として（1）命にふれる憩いの場～レクリエーション、(2) 楽しく学ぶ～教育・環境教育、(3) 動物を絶滅させない～種の保存、(4) 動物のことを深く知る～調査・研究、を挙げています。

そして各地の動物園は、それぞれの土地の気候・風土・歴史・文化を背景に独自の動物園作りを行なっています。

釧路市動物園は、次の３つの目標により基本理念に沿った動物園づくりを進めていきます。

１　「いのち」を伝える

生きている動物を通して動物園は、いのちの大切さを伝えます。目の前にある「いのち」と「いのちのつながり」をとおして、さまざまな動物たちをはぐくんできた多様な自然環境とその保全の大切さを伝えていきます。

（1）いのちの大切さを伝える

動物園という本来の生活圏から切り離された人工的な環境であっても、動物たちはそこで子を産み、育て、寿命を全うしていきます。動物園では、一般家庭で飼育することのできない危険な動物や大型の動物ばかりではなく、親しみやすい小さな動物までさまざまな動物の誕生から死までを伝えます。

動物たちに出会い、何気ないしぐさや動き、来園者に示す動物たちの反応を見て、何を考えているのかわかるような気がするのは、生きることの根本が同じだからはないでしょうか。動物との出会いから生まれる動物への興味や関心が、新たな好奇心や想像力を刺激し、いのちや自然のいとなみの不思議さを気づかせてくれます。

（2）環境保全の大切さを伝える

アムールトラやホッキョクグマ、レッサーパンダなど、地球温暖化の影響をもっとも受けやすい寒冷地域に暮らす動物たちが、今、絶滅の危機にあります。釧路という冷涼な気候を利用して、こうした動物たちの飼育・繁殖を進め、地球規模の環境保全について考えていきます。

私たちの住む道東には120羽が残るのみとなったシマフクロウをはじめ、たくさんの野生動物が、自力で生きていくための環境を必要としています。野生動物の存在感や力強さ

は、かけがえのない命や環境問題について考えるきっかけとなるものです。

しかし豊かな自然が残された地域ゆえの課題もあります。傷ついて保護収容される野生動物は希少種の割合が高く、治療後の野外復帰に取り組むと同時に、復帰できない種については繁殖を図って次の世代を復帰させようとしています。こうした活動をとおして、身近な環境保全の大切さを伝えていきます。

また、タンチョウについては、50 年におよぶ住民の献身的な給餌活動により絶滅の危機を脱しました。しかし、まだまだ監視が必要です。タンチョウを守ることは湿地を守り、釧路湿原を守ることは周辺の森林とそこに暮らすたくさんの生き物を守ることになります。市のシンボルとして、動物園がこれまで培った飼育・繁殖技術と魅力的な展示による教育普及活動をとおし、これからもタンチョウの積極的な保護に取り組み、世界的にも貴重な湿地の大切さを伝えていきます。

2　感動と発見のある動物園

来園者誰もが期待することは、動物たちが活発に動き、いきいきと暮らす姿を見ることです。子どもたちが目を輝かせて夢中になるような動物との出会いは、それを見守る大人にも満足感をもたらし、かつて子どもであったころの感動がよみがえることにもなるでしょう。

さまざまな動物の姿を知ったときの驚きや経験を家族や仲間と分かち合うことで新たな会話が生まれ、さらなる楽しみへとつながっていきます。

そのためには、動物たちがいきいきと暮らし、安心して子どもを生み育てられるように環境を整備し、見せ方や解説を工夫することで、現在飼育している動物のこれまで気づかなかった行動を見てもらえるような展示が必要です。近年の科学技術の進展と動物生態研究の蓄積が新しい展示方法を可能にしています。動物たちにストレスを感じさせることなく、いきいきとした行動を再現できれば、入園者の満足度を高めることができます。

同じ目線で間近に見せる展示は動物との距離を縮め、あらたな感動と発見につながっていきます。そんな動物園であれば「また来たい」と思ってもらえることでしょう。

3　誰もが楽しめる動物園

当園の特徴である広い敷地を最大限に活用し、既存の自然景観を生かしながらゆったりと動物たちが配置された園内で過ごすことで、日常の暮らしから離れ、開放感を味わいながら動物たちと出会うことができます。

そのためには、1 日をゆっくりと過ごすことのできる休憩施設はもちろん、誰もが安心して園内を移動できるような園路やわかりやすい案内板を整備し、移動手段や利便施設の充実と同時に、ガイドスタッフなどの人的配置も必要です。

来園者の年齢や目的に応じた参加型・体験型のイベントの充実を図り、観光面からは、多言語の案内板や解説板、リーフレットの整備など、誰もがいつ来ても楽しんでもらえる動物園作りを進めます。

Ⅳ　目標達成のための基本方針

この目的を達成するために具体的には次のような動物園作りを目指します。

1　生息環境や展示目的を明確にしたゾーン再整備を行います

動物舎の老朽化に伴ない、今後は改修や改築が不可欠になりますが、動線を考えながらゾーンごとにテーマを設定し、それに合せて現在飼育している動物の再配置を行います。しかし、動物が死亡した場合の補充は年々難しくなっています。その場合はそれぞれの展示目的に合った手に入りやすい別の動物に代えていくことも必要となります。

（1）北海道ゾーン：「ふるさとの動物たち」

釧路地方は、国内でも希少な野生動物の最後の砦として残されている貴重な地域であり、この自然環境を次代に残すことはわたしたちの責務です。

そこで道東の自然景観を残している「北海道ゾーン」の充実を図り、北海道で見られる動物たちをここに集約します。園内に住みついている野生動物も含めた環境の中で、来園者が植物や野鳥・昆虫・両生類・魚類など多様な野生生物を身近に観察することで、生態系として全体を保全していく必要性を理解できるようにします。

シマフクロウやタンチョウという世界的に希少な動物ばかりでなく、エゾリス、ヒグマ、小型フクロウ類など、身近に暮らしているにもかかわらず実際には見ることのできない動物たちの生態や、お互いのつながりが理解できるように、釧路独自の展示方法を目指す当園の象徴的なゾーンです。観光客にもコンパクトに道東の自然を知ってもらうことができるでしょう。

また、先住民族アイヌの人たちは、人間に恵みをもたらす動物たちを「カムイ」として敬意を払い、自然と共に暮らすための数々の知恵を受け継いできました。こうした考え方はこれからの地球環境保全に大きな役割を果たすと考えられ、自然との共生モデルとして動物の展示を通して伝えていきます。

（2）寒帯動物ゾーン：「寒さを生きる知恵」

寒帯動物にはホッキョクグマやアムールトラなど希少種が多く、釧路の冷涼な気候を生かした繁殖活動の一翼を担うことで国際希少動物の保全に貢献していきます。

また、トナカイのように本州では繁殖しにくい動物の繁殖群を維持し、全国の動物園に

供給していく基地となることもできます。ビーバーやカナダカワウソなどの北方系動物の繁殖を進め、動物たちの生態が理解できるような見やすい展示を行ないます。

地球温暖化影響を最も受けやすい寒帯動物の展示を通して、私たちにとって身近な「寒さ」から、地球規模での環境問題を振り返るきっかけを作ります。

（3）熱帯動物ゾーン：「多様な環境・多様な生き物」

熱帯では多種多様な生物が、網の目のようにつながりながら住み分けるという、寒帯とはまた違った暮らしがあります。キリンやシマウマなどの草食獣と、それらを餌とするライオンなどの肉食動物を同じエリア展示することで、生き物のつながりを伝えるゾーンです。

そして、餌の豊富な熱帯雨林で暮らすチンパンジーの展示を通して、そこから草原へ出ることで進化した人類について「人間とは何か」を考える場を提供します。

ダイナミックな展示とともに、施設維持の面からはコンパクトにまとめていくことが必要です。

（4）ふれあいゾーン：「命にふれる」

動物を実際にさわることで温かみを感じ、相手を思いやる心をはぐくむことができるよう、現在のこどもどうぶつえんを充実させながら、幼児でも安心して利用できる安全性と衛生面に配慮した整備を行ないます。子どもの目線に合わせた施設作りとともに、子どもたちを見守る保護者への配慮も必要です。

さわれなくても間近に動物を見ることで新しい発見や動物への関心を持てるような、あるいは動物を題材にした絵本や遊びをとおして多面的な動物への関心をはぐくめるような、こどもの特性に合わせた工夫をしていきます。

2　展示を支えるソフトの充実を目指します

動物の飼育・繁殖には、それぞれの動物本来の暮らしに沿って可能な限り動物の健康と福祉を考えた飼育施設の環境を整えることが不可欠であり、動物たちの生態や個性を熟知した飼育員と動物との信頼関係があって初めて、動物たちはその自然な営みを私たちに見せてくれるようになります。さらに、解説員によるガイドの充実、視聴覚機器・解説パネルによって動物への理解をさらに深めてもらうことができます。

また、人気の高い夜間開園や、普段見ることのできない裏側探検などの参加型イベント、学校教育と連携したプログラムの充実を図り、動物園への関心を高めてもらうことも大切

です。

これらの基礎となるのが動物について日々観察し、記録し、研究することです。市民の目からは見えにくいこうしたデータの裏付けは、感動を与える展示の基礎となるものです。動物園が目指す教育の役割を果たすためにも、こうした基礎にたったソフト面の充実は欠かせません。

3　快適な園内環境の整備に努めます

（1）園内施設の整備充実

動物園で楽しいひと時を過ごしてもらうためには、動物と動物舎における展示の工夫だけでなくそれらを補う園内環境の整備が必要です。

自然に恵まれゆったりとした園内の観覧では、疲れを感じさせない工夫として、いつでも休むことのできる利便施設や、広い園内で迷わないような方向指示板等の案内設備、ガイドスタッフの配置など、誰もが安心してゆったりと時間を過ごすことができるような配慮は欠かせません。

園路の舗装化や、車椅子や乳母車でも移動しやすい段差の解消・傾斜の緩和等バリアフリー仕様に努める他、広い園内の移動手段についても検討していきます。

（2）娯楽施設の充実

開園以来、園内ののりもの広場は釧根地方唯一の総合的遊園地として親しまれ、現在11基の大中型電動遊具やバッテリーカーなどのコイン式遊具を季節運行しています。

これまで、新規遊具が導入されると利用者数が増加するという現象を繰り返していましたが、道内の遊園地やテーマパークの増加、交通手段の高速化、レジャーの多様化、さらには少子化の進行もあって、平成３年のＳＬコースター導入後の遊具利用者数は大きく減少しました。

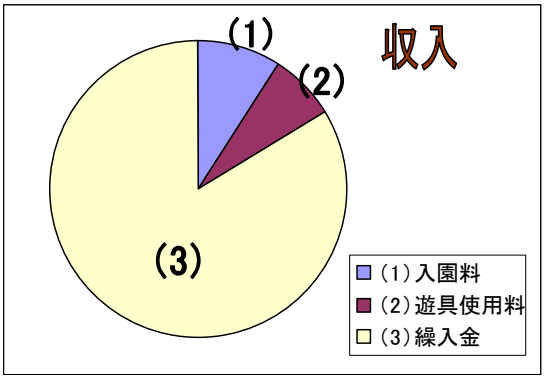
平成15年度からは遊園地一日券を発行し、年２回の遊園地無料開放など利用者サービスを充実させてきていますが、今後も引き続き地域における身近な娯楽施設としての役割を担っていきます。

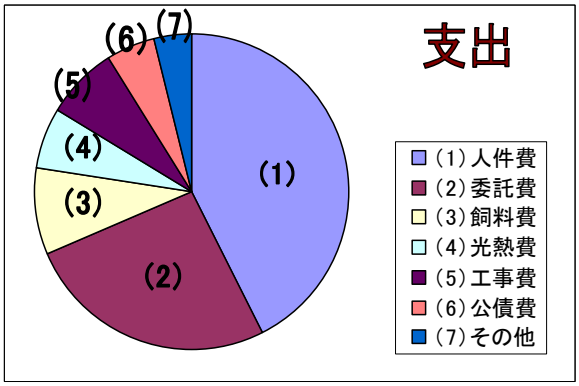
今後は幼児・児童が利用しやすい中・小型遊具への更新を図り、また、動物や自然をもっと身近に感じることができるような動物園らしい娯楽機能を備えた体験学習型遊具施設を充実させるなど、動物園での「楽しみ」を増幅させていきます。

4　健全な動物園運営を進めます

（1）市民理解を得た財政運営、整備計画

動物園予算は「動物園事業特別会計」として独立しています。平成20年度の総事業費3億3,000万円のうち、収入は入園料3,000万円と遊具使用料2,400万円であり、残りは一般会計からの繰り入れです。支出は人件費1億4,000万円、委託費8,600万円、飼料費3,000万円、光熱費2,000万円、工事費等2,500万円、公債費1,600万円、その他1,300万円となっています。





動物園はこれまで、他の社会教育施設と同様に利用料金を低く押さえながら、障がい者等への入園料を減免とし、平成16年度からは小中学生の入園無料化、通年パスポートの発行など、利用促進を図ってきました。

しかし、基本構想の具体化に伴って今後必要となる施設の再整備や機能の充実には多額の費用がかかるため、事業の推進にあたっては、市民への理解を求め合意形成を図っていくことが不可欠です。

特に、これまで遊園地の象徴として活躍してきたＳＬコースター(ジェットコースター)は、平成19年の大阪吹田市の事故を受けた検査基準の見直しにより、安全運行を続けるために必要となる点検整備に多大な費用がかかることになってしまいました。市民負担の軽減を図るためには、入園料や遊戯施設収入の増を図る一方で、経費節減に取り組む必要があり、その一つとして、SLコースターについては廃止を含めた検討を行ないます。

動物園自身の節減努力と共に、個人や団体、企業に対しても物心両面にわたる支援を求めながら、魅力ある動物づくりに向けた管理運営を行なっていきます。

（2）18万人の入園者をめざして

動物園が利用者にとってまた来たいと思える楽しい空間であればリピーターとして何度でも足を運んでくれますし、ここにしかない魅力があればたくさんの来園者を引き付けます。釧路湿原周辺に点在する観光・自然観察関連施設と連携を深めることで地域全体の魅力アップを図り、相乗効果による利用者増につながっていきます。

とりわけ、道東観光の玄関口である「たんちょう釧路空港」に近いという立地条件を生かした観光客の誘致や、寒い冬もいきいきと暮らす北海道産動物や寒帯動物の特徴的

な展示により、冬季間の利用を促進することで入園者の増加を図っていきます。

「入園者数」の推移は、利用者の満足度を推し量り利活用の拡大につながっているかどうかを検証する大切な判断材料となるもので、日本動物園水族館協会では所在地の都市人口数を入園者数の目安としています。そこで当面 10 年で釧路市の想定人口である 16 万人の入園者を目標にしながら、最終的には基本構想に沿った改革の推進により、観光客の誘致効果を加味し 18 万人の達成を目指したいと考えます。

そのためにも長い目で見た憩いの場、教育の場として、動物園本来の役割を果たしていくことができるような施設整備やソフト面の充実が何よりも大切です。

人口関連指標

人口指標区分	平成17年(2005年)	平成29年(2017年)
総　人　口	190, 478人　〔100. 0%〕	159, 947人　〔100. 0%〕
0～14歳	24, 683人　〔12. 9%〕	17, 742人　〔11. 1%〕
15～64歳	125, 447人　〔65. 9%〕	92, 835人　〔58. 0%〕
65歳以上	40, 344人　〔21. 2%〕	49, 370人　〔30. 9%〕

平成17年値は国勢調査に、平成29年値は市推計による。

5　市民と共に歩む動物園づくりを進めます

多様なメディアを使って動物たちの最新のニュースやイベント、さまざまな活動状況を伝えたり、動物園の研究成果を積極的に公表して動物園が果たしている役割や目的を理解してもらうことで、市民一人ひとりが身近に動物園を感じ、リピーターとして何度でも自分の好きな動物に会うために足を運んだり、何か自分ができることはないかと考え行動してもらえる、そんな参画型の動物園づくりを進めます。

さらに、市民ばかりでなく、企業の協力や支援活動を含めた地域全体で動物園を支える仕組みづくりを進めていきます。

V　基本構想の実現に向けたスケジュール

基本構想の具体化にあたっては、次のように取り組んでいきます。

1．基本構想は、20 年間の基本計画を立てて実現していきます。

2．基本計画は、概ね前期 10 年と後期 10 年とに分けて策定することとしますが、諸情勢の変化を見ながら必要に応じて見直しを行いながら進めます。

3．　基本計画が策定されるまでの期間は、基本構想との整合性を図りながら、実施可能な施策について先行して取り組むこととします。

平成 21 年度　　平成 41 年度

基　本　構　想

基　本　計　画（前　期　）　基　本　計　画（　後　期　）

↑ 開園 35 年（平成 22 年）　↑ 開園 40 年（平成 27 年）　↑ 開園 45 年（平成 32 年）　↑ 開園 50 年（平成 37 年）　↑ 開園 55 年（平成 42 年）